旧制中等学校の作文教育資料

――「作文選」（福岡県中等学校）のばあい――

野地潤家

一

「作文選」は、福岡県中等教育研究会国語漢文部会によって編まれ、昭和一二年（一九三七）六月一日、福岡県中等学校購買組合から刊行された。本書は、福岡県下の中等学校生徒の作文を収録した、県単位の文集である。本文は菊判上下二段組み、二一五ページから成り、巻末附録には文題例が分野（形態）別・学年別に表示されている。

「作文選」には、福岡県下全域にわたって中等学校生徒の作文が集められ、生徒たちへの作文学習資料として役立つようにという心くばりが見られる。本書は旧制中等学校で用いられた作文教育資料として、独自性に富んでおり、学習者にも指導者にも重宝され、活用されたものと推察される。

以下、本書について、その構成・作文例・文題例・意義と価値等について考察を加えていくことにしたい。

二

本書には、校種別に、Ⅰ中学校・師範学校、Ⅱ農学校、Ⅲ商業学校、Ⅵ工業学校、Ⅴ女子校（女子師範学校を含む）の五つに分け、それぞれを学年別（Ⅰ・Ⅴ）・学年順（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）にして生徒作品が収録されている。

いま、校種別区分にしたがって、学年別あるいは学年順に収録された生徒作品名・校名を示すと、つぎのとおりである。

Ⅰ　**中学校・師範学校（男子のばあい）**

第一学年（一四編）

1「入学の喜び」（戸畑中）、2「私の家」（常磐中）、3「東郷大将」（宗像中）、4「鯉幟」（門司中）、5「二百十日」（三池中）6「虫の色々」（豊津中）、7「小春日」（中学修猷館）、8「遠足」八幡中）、9「稲刈」（筑紫中）、10「近況を知らせる」（若松中）、11「校舎の窓から」（糸島中）、12「新年」（鞍手中）、13「凧あげ」（中学明善校）、14「春来れば」（豊国中）

第二学年（一七編）

15「新二年生」（豊国中）、16「我が郷の川」（三潴中）、17「郷土の人物」（八女中）、18「田植」（浮羽中）、19「蟬取「

（南筑中）、20「七夕」（築上中）、21「或日の学級日誌」（田川中）、22「風」（小倉中）、23「神幸」（中学伝習館）、24「電車の中」（福岡中）、25「教練の時間」（鞍手中）、26「旧師へ」（東筑中）、27「日章旗」（八幡中）、28「枯野」（宗像中）、29「初日の出」（嘉穂中）、30「冬の朝」（中学明善校）、31「私の愛する花」（門司中）

第三学年（一六編）

32「新しい教科書」（西南学院中）、33「太宰府詣で」（筑紫中）、34「偉人の少年時代」（糸島中）、35「僕の日常」（朝倉中）、36「動物と植物」（若松中）、37「思い出の赤蜻蛉」（嘉穂中）、38「東京相撲を観る」（常磐中）、39「学校園」（三池中）、40「校旗」（東筑中）、41「空襲に対する我等の覚悟」（福岡中）、42「生活のさま〳〵」（三潴中）、43「日本精神」（浮羽中）、44「寒月」（築上中）、45「年頭の所感を友に申し送る」（中学修猷館）、46「畑打つ人」（八女中）、47「本学年を顧みて」（小倉中）

第四学年（三五編）

48「我が前途」（鞍手中）、49「上級生の自覚」（田川中）、50「郷土の名所旧蹟」（南筑中）、51「体育の必要」（小倉中）、52「店頭風景」（若松中）、53「爆弾三勇士を弔ふ」（中学明善校）、54「熟慮断行」（福岡中）、55「平和」（豊津中）、56「最後の五分間」（東筑中）、57「豪雨」（豊国中）、58「商品見本を取寄する文」（小倉師範）、59「国体の悠久」（三潴中）、60「夏祭」（宗像中）、61「蚕」（朝倉中）、62「文明人」（西南学院中学部商科）、63「勉強法」（三池中）、64「人生と奮闘」（八女中）、65「克己」（筑紫中）、66「海外移住の友を励ます」（筑上中）、67「空」（朝倉中）、68「忍耐」（八幡夜間中）、「雄弁の必要」（嘉穂中）、69「雄弁の必要」（嘉穂中）、70「団体生活」（福岡中）、71「秋の景色」（中学伝習館）、27「防空演習」（福岡中）、73「愛国心」（八幡中）、74「精神作興」（門司中）、75「歳末の感」（宗像中）、76「郷土の産物」（浮羽中）、77「近づく戦線」（糸島中）、78「陸軍記念日所感」（田川中）、79「建国祭」（小倉師範）、80「実社会に処する覚悟を問ふ」（八幡夜間中）、81「送辞」（常磐中）、82「送辞」（嘉穂中）

第五学年（三五編）

83「境遇と決心」（福岡夜間中）、84「最上級生の覚悟」（鞍馬中）、85「国体の精華」（築上中）、86「我が家の歴史」（中学明善校）、87「実業と道徳」（中学修猷館）、88「田園と都市」（福岡師範）、89「勤倹尚武」（中学伝習館）、90「富貴論」（嘉穂中）、91「素養」（福岡中）、92「創造と模倣」（小倉師範）、93「災害見舞文」（八幡中）、94「書斎より」（筑紫中）、95「体験」（常磐中）、96「吾が好める人物」（浮羽中）、97「国産品」（門司中）、98「時局に処するの道」（糸島中）、99「夏休の回顧」（三潴中）、100「調査を依頼する文」（東筑中）、101「入試を前にして」（豊津中）、102「秋と読書」（福岡夜間中）、103「燈火可親」（南筑中）、104「修養の目的を答ふる文」（朝倉中）、105「実弾射撃」（豊国中）、106「権利と義務」（小倉中）、107「明治節の意義」（八女中）、108「旧師に志望を述ぶる文」（中学伝習館）、109「隣国を観る」（田川中）、110「日本の文化」（西南学院中）、111「寒稽古の様子を知らせる」（豊津中）、112「人間到る所に青山あり」（三池中）、113「社会道徳」（福岡師範）、114「卒業

にあたりて」（若松中）、115「卒業にあたりて」（福岡夜間中）、116「卒業式答辞」（中学修猷館）、117「我国の産業」（福岡師範）

Ⅱ 農学校（二八編）

118「実習農園の手入」（一年）（田川農林）、119「柿」（第二本科一年）（粕屋農）、120「馬」（第二本科一年）（三井農）、121「温室の花」（一年）（嘉穂農）、122「苗代田」（二年）（福岡農）、123「篤農青年」（二年）（築上農）、124「我が校の農園」（二年）（鞍手農）、125「田草取り」（二年）（遠賀農）、126「稲刈」（二年）（嘉穂農）、127「収穫」（二年）（朝倉農）、128「吾輩は米である」（二年）（三池農）、129「農産物品評会を見て」（二年）（糸島農）、130「田園と都市」（二年）（京都農）、131「温室栽培」（二年）（八女農）、132「演習林の手入」（二年）（田川農林）、133「麦踏み」（第二本科二年）（三井農）、134「苗木を註文す」（二年）（企救園芸）、135「鶏」（三年）（朝倉農）、136「宮崎安貞翁を憶ふ」（三年）（糸島農）、137「麦刈を依頼する文」（三年）（八女農）、138「農村の青年」（三年）（京都農）、139「農士道を論ず」（三年）（企救園芸）、140「栽培日記」（三年）（鞍手農）、141「汗の価値」（三年）（福岡農）、142「産業組合の創設を祝す」（第二本科三年）（粕屋農）、143「農具註文書」（三年）（築上農）、144「農産品販売依頼状」（三年）（三池農）、145「農業立国」（三年）（福岡農）

Ⅲ 商業学校（一三編）

146「小学校時代の思い出」（一年）（大牟田商）、147「親切」（一年）（直方商）、148「予定と実行」（一年）（飯塚商）、149「友を招く」（第一種二年）（福岡商）、150「我が敬慕する人物」（三年）（門司商）、151「至誠一貫」（三年）（小倉商）、152「盂蘭盆会」（三年）（久留米商）、153「河村瑞軒を憶ふ」（四年）（大牟田商）、154「商況を照会する文」（四年）（飯塚商）、155「商況を照会する文の返事」（四年）（飯塚商）、156「商業と道徳」（四年）（福岡商）、157「貿易の現状を見て所感を述ぶ」（五年）（久留米商）、158「商業立国の意義」（五年）（小倉商）

Ⅳ 工業学校（七編）

159「お茶の着否を照会する文」（一年）（八女工）、160「我輩は犬だ」（一年）（福岡工）、161「我が校の特色」（二年）（三井工）、162「八幡製鉄戸畑作業所を見る」（二年）（小倉工）、163「実習工場から」（三年）（浮羽工）、164「肖像画を描く」（三年）（八女工）、165「工業日本の恩人」（三年）（小倉工）

Ⅴ 女学校

第一学年（一六編）

166「入学の喜び」（浮羽高女）、167「教室の窓から」（久留米高女）、168「旧師に近況を知らせる文」（女子師範）、169「我が家」（田川高実女）、170「休暇中のことゞも」（福丸高実女）、171「秋の風物」（宗像高女）、172「秋の風物」（九州高家政女）、173「運動会」（早良高女）174「或る日曜日に」（鶴城高女）、175「日章旗」（黒木高実女）、176「一年を顧みて」（鎮西高女）、177「年賀状」（飯塚高女）、178「初詣で」（南吉富実女）、179「幼時の思

い出」（門司実高）、180「火事見舞」（福岡市第一女）、181「卒業のお姉様を送る」（築上高女）

第二学年（一二編）

182「一年生を迎へて」（小倉高女）、183「友へ」（柳河高女）、184「私の希望」（山門高実女）、185「七曲」（京都実高女）、186登校の途上」（福岡女）、187「お洗濯」（筑紫高女）、188「家事の手伝」（久留米高家政女）、189「病気見舞の文」（久留米昭和高女）、190「冬の黄昏」（西南女学校）、191「私の崇拝する人物」（折尾高女）、192「紀元節の日に」（勝山高女）、193「夕のひと時」（朝倉高女）

第三学年（一一編）

194「我が校風」（福岡高女）、195「夕立」（京都高女）、196「『竹取物語』を読んで」（県立筑紫高女）、197「六の巻よさやうなら」（大牟田高家政）、198「髪」（柳河高女）、199「女性と読書の趣味」（大牟田高女）、200「冬の朝」（勝山高女）、201「若水」（椎田高実女）、202「真の女性美」（久留米高女）、203「送辞（直方高女）、204「送辞」（小倉高女）

第四学年（一六編）

205「最上級生としての覚悟」（若松高女）、206「修学旅行記」（八幡高女）、207「時」（門司高女）、208「真剣勝負」（戸畑高女）、209「わが国民性」（八女高女）、210「女性の使命」（三潴高女）、211「感謝の心」（糸島女高）、212「母を失へる友へ」（九州高女）、213「清澄の秋」（香椎高女）、214「我が歩める道」（小倉高女）、215「歳末の風景」（田川高女）、216「母」（直方高実女）、217「母」（女子師範）、218「心」（福岡高女）、219「答辞」（嘉穂高女）、220「答辞」（福岡高女）

右の収録作品数を校種別・学年別にまとめると、つぎのようになる。

学年＼校種	Ⅰ 師範学校中学校	Ⅱ 農学校	Ⅲ 商業学校	Ⅳ 工業学校	Ⅴ 師範学校女学校	計
1年	14	4	3	2	16	39
2年	17	13	1	2	12	45
3年	16	11	3	3	11	44
4年	35		4		16	55
5年	35		2			37
計	117	28	13	7	55	220

「作文選」には、福岡県下一〇三校（うち、中学校三〇校、実業学校二七校、女学校四六校の生徒作文二二〇編が収められている。これらのうち、中学校・師範学校（男子生徒のばあい）からは一一七編が採録されて、全体の半数を上回わっている。学年ごとの採録にも、学年によって多少の差はあるが、大きい偏りは見られない。四年の五五編が最も多く、二年・三年の四五編・四四編がこれにつづいている。

本書の「凡例」には、「実業学校の下学年に文例の少いのは、中学校の下学年分を利用することにしたからである。」と記されている。

なお、各学年ごとの生徒作品については、ほぼ季節順に配列してあり、学校生活・家庭生活・社会生活における年間を見通しての位

置づけがなされている。

三

「作文選」に収められた二二〇編の作文群から、文例として一五編を選んで掲げると、つぎのとおりである。

1　二百十日（前掲通し番号、5）　三池中学校第一学年

西東さへも碌に知らなかった尋常一年の秋。早朝に来襲した大風はいつ止むとも知れず墨を流した様な空より大粒の雨が、地を打ち戸を叩く。ヒューガタ〳〵、無気味な音をたてる木々、雨戸。板戸の隙間よりは雨さへ漏り、庭に置きざりにしたバケツはガラン〳〵と音を立てつゝ一面に転げ廻る。時々開戸の閉ぢる音も交って、何とも言へぬ恐しさが身辺に漂ふ。

家内中四畳半の一間に父を中心として「これから先どうなる事やら」「実にひどい旋風だ」等と話を交される父母の御言葉に、「百姓は稲が全滅して困るだらうになあ」と言はれると、僕は幼な心にもあの青々と成長する稲が、皆倒れてしまふなら、……と百姓さんに同情しないでは居られなかった。大風はいよ〳〵渦を巻いて地上を吹きまくる。父母の顔には不安が募って行く。僕は父の傍に縮こまってゐた。

折しも一しきり吹き来る大暴風に、メリ〳〵ドド、ドシンと。一大音響と共に床が動いた。すはこそ、雨戸に近より穴から覗いて見れば、あゝ！悲惨なるかな。大木を誇ってゐた庭の柿の木が根こそぎに打倒れ、大枝小枝が数限りなく折れてゐる。今の風に垣根がすっかり打倒れて隣の家の庭が見通される。父母は大変な御心配であるが、一年の僕にはこの場面が面白かった。併し次の瞬間此の上大風が強くなれば今度こそ家が倒れるかもしれないと思って恐しくなった。

併し今日が登校日であることを思ふと、僕は無茶苦茶に心が勇む。「何だ。この位の風が、恐しくて日本男子になれるか。僕は行く、きっと。そして皆を、いや先生を驚かす」と、元気よく出た。僕は父の合羽の中に隠れて飛ばないやうに歩いた。ヒュー〳〵、と言ふ音は一層烈しく耳をうつ。そして合羽の裾がバタ〳〵音を立てる。二三人の人が身を屈めて行く。

学校に来て見ると、先生方が三人居られて「やあ！〇〇君よく来たね。よく来られたね」と、大変な驚きである。教室は机が片よせてあり床には雨漏りで、大変な水だ。

「ひどい風と雨で、教室は湖ですよ」等言ってゐられる。硝子戸は一枚破れて、其の所にはありあはせの板切れが変な形にはられてある。時々風に交って瓦の飛ぶのが硝子越に見える。風も少し和いだので帰ることにした。

ガラ〳〵言って落ちる瓦を避けながら帰りを急ぐ時、ふと見上げたら、電柱に一本傘が引かゝって風の吹く度に物淋しく揺れてゐた。（同上書、三～四ページ）

2　私の愛す花（前掲通し番号、31）　門司中学校第二学年

西洋草花を愛することが現代趣味となった今日では、美麗な春の木の花も、可憐な秋の野の花も、もはや現代人の頭から次第に遠ざかり初めている。併し私は矢張り古来の花木を愛し、草花を愛好する。就中梅の崇高な姿を眺めるときは、何とも形容の出来ない美感に打たれるのである。

梅は第一に高尚である。卑賤な態がない。昔菅原道真は「東風吹かば香おこせよ梅の花、主なしとて春な忘れそ」と詠じた。若し梅の花が傲奢で濃艶な花であるとしたら、到底かの道真公をして自身の心境をば伝へしめられなかったであらう。公が梅花を好まれた理由も此の辺にあるかと思ふのである。桜も良い。然し桜は何か蔵粛を欠く。梅の様な静閑な気分がない。梅は高潔であるが桜は優麗である。

閑かな二月の一日の午過ぎ、広い庭園の老梅の梢に、鶯が〝春は我物だ〟と云ふやうに美しい音色で囀ってゐるのは一層趣が深い。

梅は潔白であり、清澄である。微塵も淫らな点が無い。真に梅花は花の最高であり、典型である。

私は如何に考へても梅を花の王者であること断言せざるを得ない。

若し人が問ふたならば、私は遅疑なく答へるであらう。

「崇高なるが故に梅を愛する」と。（同上書、二四～二五ペ）

3　年頭の所感を友に申し送る（前掲通し番号、45）　中学修猷館第三学年

新年おめでたう。君も定めし希望に満ちた昭和第十二年をスタートせられたことゝ思ひます。

僕等も愈々今年は第三学年の課程を終へて第四学年に進み、学校の中堅として大いに活躍すべき時がやって来たのです。希望へと一路邁進すべき時がやって来たのです。人は誰でも希望を持って居ます。そしてそれに近づかうとして努力して居ます。若し希望のない人があったら、その人は人として生きて行く力を失った人であります。「希望なき生活」それは何処に生き甲斐があるでせうか。生きて居るといふ喜びがありませうか。それは生きた屍ではないでせうか。私はこの様な生ける屍となることなく、日進月歩刻苦勉励、不断の修養を積み、一歩々々希望への道を辿らうと決心したのであります。私は「備へよ常に」といふことを聞いて居ります。何事にも十分なる準備が必要であります。私達が勉強するにしても予習が必要であります。予習をすればそれだけ先生の説明もよりよく理解されて、自分の知識も広くなるのでありますが、私はこれまで度々予習を怠ることがありました。諺に油断大敵といふこともありますから、どんな小事でもこれを軽視して、準備を怠るやうなことは、今後致すまいと決心しました。それと共に断行の勇気と忍耐力とを、大いに養はねばならぬと覚悟しました。如何によく準備してもそれに勇気と忍耐力とがなかったら、有耶無耶になってしまふでせう。

それで私は今から寸陰を惜しんで、今の吾等の職務「勉学」に一心にいそしみ、大いに頑張らうと思ひます。殊に今年は牛の年です。どっしりと落付いてゐて、去年の失敗を再び重ねることのないやうに過さうと思ひます。そして非常時と言はれる今年を、緊褌一番大いに努力して行きたいと思ひます。

最後に平常の厚い友誼を謝し併せて兄が益々御元気に過されんことを祈って筆を擱きます。（同上書、三九～四〇ペ）

4　克己（前掲通し番号、65）　筑紫中学校第四学年二種

一体人が万物の霊長として生物界に君臨して居れるのは何故であらうか。それは人が理性を有するからのことである。この理性は自覚又は反省となり、更に感激ともなり克己ともなって、我々の良心

の中核を形成して居るものである。

人は慾望の動物である。慾望は動物の本然的要求をもつ人間をして今日の社会を作らしめ、地上の如何なる生物もが企て得ない文化を作らしめたものは、実にこの慾望であり、之に伴ふ努力であったのだ。併しながら人間の慾望は無限であり、之を満足せしめる人の能力には限度がある以上、此の能力を越えた慾望が生じた場合、そこに不満煩悶の起るのは当然のことである。且人は集団的生活をなして居る為に、個人の利益とはなっても、他の多くの人々の不利益となる場合も珍しくはない。此の様な状態に於て、人が自己の慾望を悉く満足せしめようとし、自己の要求をし尽さうとしたならばどうであらうか。必ずや不正な方法に訴へても自己の要求を満足せしめようとして、所謂弱肉強食、阿鼻叫喚の地獄が出現するであらう。それは人生の破滅であり、人類の滅亡である。自制心克己心の必要は此処に生じて来るのである。

然らば克己とは如何なるものか。それは慾情を抑へる一つの理性の働きに他ならない。「自制」といひ「没我」といふのも畢竟は同一義に過ぎない。克己心のある所、人格は向上し、健全な社会も招来されることゝなるのである。

克己のない人生、それは禽獣の生活である。人が人として恥ずかしくない事を欲し、又他の動物と区別して待遇されることを欲する以上、克己心は絶対に必要である。人間が誇を有することを望む間は、人間から克己心を取り去ることは出来ない。何となれば、克己心は地上幾百万の生物の中人間のみが有する、又有しなくてはならない道徳の最高規準の一つであるからである。

さて克己心を養成するには果してどうしたらよいか。答は簡単だ。即ち不断の自制修養の一語に尽きる。心中常に起りつつある色々の不純不正な慾望を全力を挙げて抑へればよいのである。我々は幼い時に高崎正風の克己について習った事がある。之と自分達の平常とを比較して見る時、正に汗顔に堪へない。我々は所謂「大事」にのみ気を取られて、卑近な事を軽視し過ぎては居ないだろうか。あれを思ひ、これを思うて、静かに反省すれば、到る所に修養の機会は存して居る。我々は先づ此等を利用して克己心養成の手段とすべきである。（同上書、五八～五九ペ）

5　富貴論（前掲通し番号、90）　嘉穂中学校第五学年

身玉樓に居り財宝を列ね、任国の重きを負うて、声望高きは、これ万人の斉しく欲する所なり。

然れども、我聞く「其の道を以て之を得ざれば処らざるなり」と、然り。男子豈不義を以て之を貪らんや。

富貴には天運あり、皆共に得るを得ず。たとひ富貴なりとも心に悩みあらば断じて幸福とは言ひ難し、古人も「不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し」といへり。

赤貧洗ふが如くとも、心広く行ひ正しくば、我寧ろ甚んでこれに居らん。雨漏る軒に月を仰ぎ、破窓風吟ずるところ人知らぬ趣を味ひ、疎食を食ひ、肱を曲げて高臥の安きを楽しまん。

さはいへ、大は国家の経綸より、小は親に仕へ身を養ふに至るまで、財貨なくんばこの志を達する能はず。空しく傷つき仆るゝは、これ我等が日常目睹する所。正しき生業を営み、以て富貴の栄を受くるは、古来賢人の選みし所、何の愧づる所かあらむ。

されば富貴に執するも陋なり、貧賤に泥むも愚なり。我等の真に冀求すべきは道を楽しむことこれなり。富貴を得ると得ざるとに論

なく、勉励努力道を行うて以て自ら怡然たるにあり。
かくて、富貴来らば身を以て世を済し、富貴縁なくんば清廉高適以て百世の師とならん。唯、天下の大道に勉むるのみ。悪んぞ、富貴に拘らんや。（同上書、八三ペ）

6　秋と読書（前掲通し番号、102）　福岡夜間中学第五学年

夏去り秋となれば、だらりとした気持、耐へ難い暑さから開放されて、新秋の涼味と共に身心共に引緊って、生れ変った様な爽快さを覚え、新らしい希望を以て仕事に取り掛らうと言ふ進取的積極的な生々とした気持になる。

秋にも異った二方面の見方がある様に思はれる。即ち清く高く澄み渡った秋、収穫の秋、野も山も錦繡を粧ひ稲穂みのる秋、スポーツの秋、登山ハイキングの秋、これ等は皆秋の積極的光明的方面の一観察である。

併しこの反面にやがて没落を思はせる秋、紅葉に飾られた秋の野山の派手やかさのかげは将に消えんとする燈火のひとしきり燃えさかるにも似た哀愁をかくして居るではないか。人生の無常を感じさせる秋、凋落死滅の悲哀死の一歩前を思はせる感じのする秋の一面を私は見落す事は出来ない。

私は早く両親に死別し孤独の生活を送って来た関係か、此幽寂な秋の気分がたまらなく好きである。此秋がかもし出す清浄幽寂で透徹な気分の中に読書三昧に日々を過ごす事が出来たならどんなに幸福だろうか。

読書程私のこの淋しい孤独な気持に精神的慰安を与へて呉れるものはない。しかもその内容はしんみりとした情緒を内容としたものが好ましい。純文学的教訓であって欲しい。

私は慌しい過去を過して来て読書の体験にとぼしいだけに尚更それを欲求して居るかも知らない。併し此幽寂な気分に浸りながら何時迄も〳〵つきざる情緒を追って瞑想にふける時私は私自身の野身をさへ恨みたくなる。

俗世間との交渉を断ち一読書生として生涯を過したい衝動に駆られる事さへある。

併し又一面実社会に尚する執着の人一倍強い私を発見して独り苦笑するのが常である。（同上書、九四～九五ペ）

7　卒業式答辞（前掲通し番号、116）　中学修猷館第五学年

本日茲に多数貴賓の臨場を辱ふし、第四十九回卒業證書の授与式を挙行せらる。生等の光栄何ものか之に加へん。

顧れば昭和七年春四月、生等が新らしき希望を乗せて来り学びし時に、悉く之れ幼稚未熟なる少年なりき。今や高等普通教育の課程を終へて本日の栄誉を負ふ。之偏へに館長先生を始め、諸先生の懇切なる御薫陶の然らしむ所こゝに本館を去らんとするに当り、感激殊に新にして鴻恩慈々深きを覚ゆるものなり。感謝と幸福とに満ちし五ケ年の生活は今や去って夢の如し。其の間、颯々たる百道の松籟を聞き、澎湃たる玄海の波濤を浴しびもの皆之れ心身を練るのよすがにして、偉人賢才を輩出し、剛健質朴を風とする本館に学べるは、得難き幸福と言はざる可からず。意気に溢れ、力に満ちたる中学生活を終へ、慈愛深き恩師の膝下を離れんとす。離恨綿々たるものあり。

今や皇国は内外共に多事多端、国家の吾等に期する所真に大なる

ものありと聞く。非常の秋、生等各々其の趨舎を異にすると雖も、斉しく挙々として聖諭を服膺し、攷々として教訓を実践し、万難屈せず千苦撓まず。中堅国民としての大道に邁進し、爲鈍を尽して皇恩に報い、微衷を捧げて師恩の万一に報ぜんこと、この光栄を空しうせざる所以なり。

在校生諸君、共に兄たり弟たること四年、元寇の遺蹟を背景にして学舎の人たり。智を研き相睦び相親ゆるも束の間なりきしが、袂を別つに当って転た感慨無量なるものあり。親愛なる諸君。校訓を遵守して研鑽倦まず、他日の大成を期して五十年の歴史に光輝を添へんもの之又諸君の責所たるべし。終りに臨んで、館長並に諸先生の健康と館運の隆昌とを祈り奉る。満堂各位の清栄を祝し、聯か以て答辞となす。

昭和十二年三月五日　第四十九回卒業生総代　某（同上書、一一〇ページ）

8　農業立国（前掲通し番号、145）　福岡農学校第三学年

天をも突かうと聳え立つ巨木にも、これを支へる幹があり、これを揺がせぬ根があって初めてその全きを得てゐるのである。

この巨木にも比すべき躍進日本の幹となり「農は国の基なり」とか、「農は国の大本なり」とか言ふやうな古い言葉を拾ふまでもなく、それは我国建国の当初から営まれて来た尊い農業であると信ずる。

畏くも天照大神は、高天原に於て親しく耕作し、養蚕を励み給ふたのである。そして天孫瓊々杵尊をこの地に降し給ふや、その御神勅にも、

「豊葦原瑞穂国」と仰せられ、更に農耕の道をも垂教し給うて、明らかに農を以て立国の大本となすべき事をお示しになったのである。

爾来三千年、歴代の天皇は常に勧農に御心を砕き給ひ、万民も亦聖旨に奉遵してこの業に励み、国運国勢の助長に努めて来たのである。

国史を繙いて国運の消長を案じてみるに、国運隆昌の時代は必ず農業が栄えて居り、農業不振の時は国勢も亦必ず傾いてゐるのである。之を思ふ時、我国に於ては如何に農業の興隆発達が必要であるかを痛感すると共に、弥々農業立国の念を深うせずには居れないのである。

又商工業の著しく勃興した我国の現勢に於てさへ、農業者は総人口の約五割を占めて、農業はあらゆる産業の中心となってゐるのである。即ち農産物を原料とし、之を加工製作するところに、製糸、醸造、製糖等の工業が起り、これを売買するところに商業が発達するのである。

又農業は衣を与へ、食を給し、又住を恵む等、人間生活に必要欠くべからざるものを支給する源泉である。さうして衣服が足り、食物が満ち、安住を得たとき、初めて人智は進み工夫が働いて、こゝに宗教が起り芸術が現れ、哲学が生れるのである。実に農業は文化の母である。

そして農業に携はる者は、大自然を相手とし、純朴に労働に服するので、堂々たる身体と、剛健質実なる精神とが涵養せられ、世運の急変の中にも、少しもおそれることなく、よく国家を存続し国勢を維持することが出来るのである。又国家の干城として皇国のために尽す兵士を見るに、如何に農民が多く、又その質に於てもはるか

に都会人を抜いてゐるかは、敢て言を俟つまでもあるまい。
然るに現今一部の識者の中に、我国は土地が狭小で耕地が少く、人口が稠密であるから、と云ふので、商工立国によらねばならぬ、と論ずる者があると聞くが、果して我日本が商工立国を以て安らかであることが出来るであらうか。
欧州大戦当時、絶大な富力と世界に冠たる比類のない海軍とを有しながら、彼の英国が何故にあれほど苦しい経験をなめたのだったらうか。それこそ彼等が商工立国を以て独り殖民地の農業に恃んで、内地の農業を無視し過ぎてゐたからではなかったらうか。
今や日本は、国際聯盟をも脱退し、四面楚歌の声をきくの非常時に直面している。食糧並に工業原料の供給地が充分でないばかりか、我が工産物の輸入を阻止する国さへあるの現状ではないか。これでもなほ我国は商工立国によって立って行けると言へやうか。
崇神天皇は詔して、
「農は天下の大本なり。民の恃んで生くる所なり」と仰せられ、継体天皇は詔して、
「朕聞、一夫不耕則天下或受其飢、一婦不織則天下或受其寒。是故帝国躬耕以勤農業、后妃親蚕以勤女功。況在群寮百姓其可廃乗農績乎。有司普告天下令知朕意」と仰せられてゐる。立国の大本にどうして今昔の変りがあらうか。
「農業立国」それは、農耕に恵まれた大自然を有する我国としては、動かすべからざる根本鉄則であらねばならぬ。（同上書、一三五～一三六ぺ）

9　河村瑞軒を憶ふ（前掲通し番号、153）　大牟田市商業学校第四学年

徳川幕府の豪商河村瑞軒を偲び、彼の功績を称へよう。（冒頭文）
徐ろに皇国の現状を眺むる時、瑞軒の機を見るに敏して、鰻上りに成功した事実に照し、我が経済界の発展に資したいと思ふのである。（結びの段落）（同上書、一四一～一四二ぺ）

10　八幡製鉄戸畑作業所を見る（前掲通し番号、162）　小倉工業学校電気科第二学年

八幡市の北端に位する八幡製鉄戸畑作業所は、大正六年東洋製鉄株式会社として創立せられたが、業半ばにして財界の不況に遭遇し、大正十年四月、八幡製鉄所に委任経営されることになって、今日に及んでゐる。（冒頭の段落）
「もう暫くは見られんのだから、もう一度覗いて置きな」
と言はれたので再び覗いてみたら、やっぱり赤紫色に輝いてゐた。（結びの段落）（同上書、一四九～一五〇ぺ）

11　火事見舞　右礼状（前掲通し番号、180）　福岡市第一女学校第一学年

昨夜火災に御罹りなられた事を今朝の新聞で知りまして本当に驚きました。
折柄の烈風で、さぞかし御心配だった事でせう。
何方様にも御怪我などは御座いませんでしたか、御案じ申上げて居ります。
御荷物の運び出し等、如何遊ばしましたか。後始末など色々とお忙しい事でせうから、澄ちゃんをしばらく当方へお寄越しになって

は如何ですか、母も左様申して居ります。又人手が足らない様でしたら、御知らせ下さいませ、誰なりと御手伝ひに上ります。
取急ぎ御見舞申上げます。

右礼状

早速御見舞下さいまして誠に有難う御座います。御蔭様で家内一同無事で居ります。私方の失火でなかったことがせめてもの幸だったとあきらめて居ります。
あんな烈風で一時はどうなることかと心配致して居りましたが、皆様の御働きによりまして、全焼までにならずにくい止める事が出来ました。火事の模様など、詳しく御知らせ致したく思って居りますが、取込み中で御座いますので失礼致します。何れその中に詳しく御知らせ致します。
お手紙のことを母に申しますと、母も大変喜びまして、御言葉にあまへて澄子を二三日お預りして頂きたいと申して居ります。
先づは取急ぎ御礼旁々お願ひまで。（同上書、一六七ペ）

12　冬の黄昏（前掲通し番号、190）　西南女学院第二学年
日輪は已に姿を隠したが、西の空は夕映の名残りでオレンヂ色に輝いてゐる。ひっそりとした寂しい冬の夕べの冷い風が肌にしみて吹き過ぎる。電線に引懸った破れ凧が唯一つ風になぶられて揺れてゐる。足立山の頂きは鼠色に包まれて漸く黄昏が迫って来た。（冒頭の段落）
茫然として立ってゐる足もとに何処からか白い紙屑が転げて来てかさりと鳴った。底冷のする風がさっと吹いて来て髪をなぶって過ぎた。枝ばかりの木が左右に揺れる。「プーププー」と豆腐売のラッパの音が冷い風に乗って流れて来た。（結びの段落）（同上書、一七五～一七六ペ）

13　「竹取物語」を読んで（前掲通し番号、196）　福岡県立筑紫高等女学校第三学年
初、私はこの物語と、竹の中より生れ出づるといふ様な空想的叙述と、若い貴族達の失敗によって醸し出されるユーモアとの為に軽い興味を持って読みつゞけた。が最後の赫耶姫昇天の箇所に到って、これまでの興味とは異った興味ー一種の神々しさをさへ感ぜずにはゐられなくなった。それはそこに余りも神々しく、又余りも美しい永遠の女性を見出すことが出来たし、月に対する当時の人々の思慕・憧憬の念と現実に対する執着とが十分に表はされてゐたからである。（冒頭の段落）
私はこの物語が平安朝の浪漫的精神の先駆をなしたといふ点に於てよりも、或は又幾多の物語の出現を促したといふ点よりも、永遠の女性を主人公としてゐるといふ点に於て、限りなき尊敬と慕はしさを、この作者に対して感ぜずには居られないのである。この姓名不詳の一作者によって描かれた永遠の女性、赫耶姫こそは私達日本女性の中に流れてゐる浄き心の象徴である。日本最初の女文字で書かれた小説、しかもその中に描かれた主人公は浄き日本女性の象徴たる天女である。この点に於てこの竹取物語こそは私に最も深い感銘を与へた書籍の一つである（結びの段落）（同上書、一八〇～一八二ペ）

14　六の巻よさようなら（前掲通し番号、197）　大牟田高等家政女学校一部第三学年

いよ〳〵楽しみにしてゐた最初の国語の時間、新しい教科書を手にして習ふ時の嬉しさ。むづかしい言葉の中にも一課一課と理解して行くうちに自ら言ひ知れぬ興味が湧いて来る。中でも特に心に焼き附いたのは藤村の「千曲川旅情の歌」だ。

小諸なる古城のほとり／雲白く遊子悲しむ
緑なすはこべは萌えず／若草も藉くによしなし

何と上品な感傷であらう。ひし〳〵と胸に迫るものがある。

又保元物語の「乙若」にも強く心を打たれた。まだ十三歳の乙若ではあったが、父為義が兄義朝から斬られた事を知った時の驚きはどんなであったらう。けれどその悲しみの中にも健気に幼い弟達を慰め励まし、殺さうとする兄を怨まず源氏の将来を心配する心、残る母に対する心遣ひなど、お講義の進むにつれて教室内は水を打ったやうに静まりかへり、はては啜り泣きの声さへ洩れて来た。（三、四、五、六段落）（同上書、一八二〜一八三ページ）

15　心（前掲通し番号、218）　福岡高等女学校第四学年

心は私達の生活の源泉であり、又私達の一生を支配する原動力である。人生の総ての事、悲しみにしても、喜びにしても、善にしても、悪にしても、心はそれ等を生み出して行く。私達の行動は、どんなつまらぬ事些細な事でも、心に支配されてゐないことはない。都会の街路を忙しく往来する人、山間の小田にのんびりと牛を追ふ人、誰も彼も皆心の命ずる処に従って動いてゐるのである。かう考へると、心は実に神秘的な存在であって、私達の生活を規定するものであり、又、私達の生命そのものでもあると言はねばならぬ。（冒頭の段落）

人間があらゆる装飾をかなぐり捨てた時、そこに人間の心の清き姿、醜き姿は、真実の相を赤裸々に現はすであらう。光を求めて已まない良心と、暗を慕って狂ふ獣心との相剋の相が見られるであろう。この葛藤の苦悶こそ、人間生活の現実相である。我々は人間として、その生活を美しく、尊くする為、良心をみがき聖かにする事を心掛けねばならぬ。（結びの段落）（同上書、二一一〜二一二ページ）

四

前掲の文例は、各学年（一年〜五年）にわたって、1叙事文、2随想文、3手紙文、4論説文、5論説文、（文語体）6随想文、7式辞文、（文語体）8論説文、9人物論、10見学記録、11手紙文、12叙景文、13読書感想文、14学習感想文、15論説文など、各ジャンルからとり上げたものである。

これらの文例を通して、一九三〇年代半ばの旧制中学校の生徒たちの文章表現活動の傾向やその到達水準をうかがうことができる。

当時、中等学校の作文指導は、平明達意にして実用に適する各種の文章を作らせることをねらいとして進められていたが、文例に見られるように一般に修辞意識が強くはたらいており、論説・随想にも観念的な傾向が看取される。

五

「作文選」の巻末には、附録として文題集が表示されていた。

文題は、1個人家庭生活（例、私の家、愛犬など）、2学校生活（例、入学式の朝、登校の途中など）、3社会国家生活（例、日章旗、我が郷土など）、4伝記及び修養（例、乃木大将、真の幸福な

ど）、5季節（例、夏が来た、雪の朝など）6自然（天象・地理・動植物）（例、梅の花、植物採集など）、7日記（例、日記の一節、栽培日記など）、8書簡（例、病気見舞、誕生日に招くなど）、9公用（式祭文・届書・願書）、10雑、11韻文（例、四季雑詠、身辺雑詠など）、一一にわけて学年別に掲げられ、自作の際参考に供されていた。この文題に関しては、その類別にも、また学年ごとの例示にも、便宜的に扱っているところが見られ、なお精選のため検討する余地が残されている。

六

「作文選」については、編者（福岡県中等教育研究会国語漢文部会）みずから、「作文の模範書でもあり、精神の修養書でもあり、深切有益な入学受験の好参考書でもある」と述べている（同上書、「序に代へて」）。

また、「作文の上達は人格の向上と順応する。／作文道の発展は人間道の進歩に伴ふ。／微細な技巧や、小器用な細工だけで満足せられる安価な作文法なら斯の道の偽瞞である。」（同上書、「序に代へて」）とも述べている。精神主義の作文観に立っていたことを示している。

中等学校の生徒たち（つまりは、「作文選」の読者）に向って、「作文の上手な人は幸福である。／立派な表現能力を持つ人は実に仕合せである。」と述べ、「純真虚虚な態度で自然に親しみ、忠実な観察と思考とを重ね、経験に加ふるに多読と多作との勤労を厭ってはならぬ。」と諭し、さらに、「咀嚼は読者にある。活用は人にある。玩味して生命をつかみ、表現力の呼吸を捕へて、作文上の幸福を体得せられるやう、本書の熟読を勧めて置く。」とも述べている。

「作文選」が、一九三〇年代半ば、わが国の初等・中等国語科教育が最も興隆し充実していた時期に、福岡県下の全中等学校国語漢文科の協力をえてまとめられたことは、まことに意義深く注目に値するすぐれた、試みであるといってよい。

選ばれて収録された、二二〇編の生徒作文が各校種・各学年・各ジャンルにわたっていて、当時の中等作文教育の到達水準を反映していることは、すでに指摘したとおりであるが、県単位の多角的な文集として、戦前中等作文の生きた実例が数多く収録されていることは多としなければならない。

収録された二二〇編の作文資料を通して、当時の中等学校に学んだ生徒たちの日常生活、読書生活学習状況をとらえることが可能なのはもとよりとして、観察力・思索力・感受力の実質にも触れることができる。固定した型にはまった考え方に傾いている点なども、明らかにうかがわれる。生徒たちが第二次世界大戦前夜の時代の子であったことは、これを収録作文の随処に認めることができる。

各文章表現形態を通じて、文章の叙述面、語句の選び方にも、時代の特性と認められるものが少なくない。漢語などもかなり積極的に用いられている。

「作文選」そのものは、生きた文例集・文題集としてまとめられており、各文例の制作過程そのもの、指導過程そのものは明らかでない。しかし、各文例の背後には、それぞれ指導者の指導があったことを、あわせ考えていかなければならない。

「作文選」が当時どのように実地に活用されたか、そのくわしいことはとらえがたいが、中等作文教育史に、まれなすぐれた資料の一つであることは十分認められる。（昭和53年6月11日稿）（本学教授）